主婦会分会長の生活と意見

四山支部　川本フネ子

その一

夫はすこぶる健康　私は愛しています

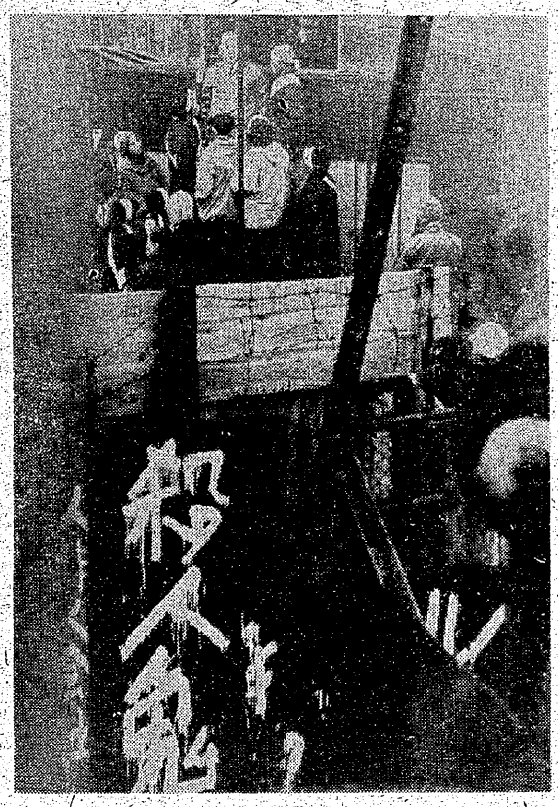
朝――。私は六時に起きます。主人が七時出勤の常一番なのでそれをアクシスに、一日の回転がはじまるのです。

炊事といっても、おミソ汁を作るくらいで簡単ですが、家族四人全員が弁当を持っていくので一・八リットルのお米もペロリ。それに「おかず」つくりが大変です。小さなシャケ一切れでも五十円もするので、何時も予算オーバーです。それで、多少の鮮度落ちは我慢して、私はすこぶる元気のようです。しかも流し台に立つ私に軽く抱きつき、頬ぺに「チュー」をやるのです。そして、意張ったように大きなオナラを鳴らす。

佃煮でも切身でも大量に仕入れ、少しでも単価が安くなるよう工夫しています。

主人は四十三才です。もう勤続二十五年のベテランなのに、差別配役でいまだに後山（あとやま）が多いそうです。会社にとってはまったく屁のような存在ですが、組合結成以来の三池魂ですから大層「しん」は強いのです。それに最近は「おかげで仕事づかれがないので、若返ってくるようだ……」といって、負けおしみ的な自慢をしています。

〝そういえば、腹がでてきて少し肥りぎみです〟が、肩の筋肉はまだ盛り上がっています。朝はきまって自分で起き「……おばさんお早よう」と挨拶するのです。主人はふざけて私のことを「おばさん」と呼ぶのですが、今日も寝起きはいいし、すこぶる元気のようです。



闘いの先頭にたつて闘うこともある主婦

しかしなければなりません。主婦として、月給一万五千円のパートタイマーとして。それに三池主婦会の一地域二十名の分会長として、PTA役員として、私は、八面六ぴの活躍です。ですから、それぞれを併用していくとすると、平常のときは朝の掃除がすんで、八時半ぐらいまでが分会長としての活動のプレイですね。私は、この限られた時間内に地域分会を走りまわるのです。――決起集会の動員要請。班長伝達。地域との情報交換――。

「……あした九時までに体育館前集合よ」「あいで起こすのは面どうなので、音量一杯にテレビの音楽を響かせるのです。これには高校三年の娘も一年の長男も、同時にぶつぶつ泡を吹きながら起きだしてきます。にきびで赤ばったい顔。二人の子供がならんだときなんか長男も髪をのばしているので、どっちがどっちなのか迷うのですが、体重も見事に発達していて「ドキリ」とするときがあります。

それに食卓を囲むとき、高校三年の娘は「母さん見たいに肥っ放しになったらショック……」といって、最近は朝めし抜きの断食です。子供の世界もいろいろと苦労が多いのですね。……差別反対、賃上闘争、反合理化の闘い、デモ……、本当に闘争以来苦しい生活の続きですが、子供たちだけでも見事に育ってくれました。しかも主人はすこぶる健康、私も順調です。

ともかく朝はてんやわんや。私はやっと皆んなを送りだすとほっとします。そして、鼻唄まじりで後片付けをしているときが一番幸福です。いい意味でのマイホームの中の平和を、しみじみかみしめるのです。

申しおくれましたが、私も九時までには県界のKストアー内に、スペシャルタイマーとして出勤のもむづかしくなるのです。走れ、走れ。私は的確に輪番制をまわすため、地域分会を走りまわる。「分会長とは走る事と見つけたり」――私はもうあきらめているのです。

しかし、本当に多くの仲間が会社をやめたものですね。絶対にあの人だけはと思われた人が、平常たのもしいことをいい切っていた人が、簡単にスクラムを離れていくのです。三池労組には、団結があるのでしょうか。組合にいま必要なのはその人たちなのに、無造作にやめている。組合も平易にそれに対処する。停年退職者の増加に加えてますます顕著ですのに。私の分会でもこの一年間に九名が退職しました。新労を含めて、百三十三軒の内の四十軒が空家で、その外在宅退職者が三十パーセントは居ます。「ヤマはもう駄目だ」といったセルウイルな流れは、とめようがないのですね。

このごろ、私は片意地なほどに思っているのですが、いまの三池労組は、執行部を含めてほんのひと握りの活動家が、その組織を支えていて、残りの一般組合員はうちの主人を含めて、職場での闘いを忘れ、それでいてパチンコもしない、酒も煙草もやらない、運転免許も持たない、といった極端に融通性のないガリガリの気骨家が多いのではないでしょうか。「統一、団結、抵抗」のスローガンは、いまでは消沈した祈禱みたいになりさがり、おおよそ前進しようとの構えがみられません。

主人は職場で、五人組の組長をもう三年間もさせられているのですが、ほかの人が所謂自称「大物」ばかりで、今年は組会議を一回もひらくチャンスがないと、サジを投げています。この一事をもってしても、その辺の事情がよく証明できると思います。

ついつい手前ミソな、大変な暴言を吐きましたが、私も自称「大物」の類ですね。とにかく一地域分会の機能が、班単位ぐらいに落ちた現状ではその機動力も数名です。したがって分会長のパワーもこの程度で釣り合いがとれるのかも知れません。

さあ―急ごう。分会長の任務が一段落したら、次はパートタイマーの仕事が待っているのです。私は自転車で走る。走る。

（次号へつづく）

×　×

三池主婦会員の皆さん、これからこの文のように「生活の中の真実」を大いに書きましょう。それは何よりも皆さんにとくに求められているものです。

随想

’70年のへきれき

三川指導部　木村守

僕にとって京都、奈良、びわ湖一周の見物ができるなど、それこそ青天のへきれきに違いなかった。妻が万国博見物の話しをしだすと「何になる。月の石を見たって、それが自分らの生活にどれだけのプラスになるものでなし」など理屈をこねては、あしらうより外に術を知らなかった。

というのも、貧困な家庭に育ち故あって炭鉱の生活に入り二十八年、ちっともよくならない炭鉱の給料で何の旅行ができる。しかも行くとなると、何日かは休業をしなければならず、それがひいては高二の二女、中二の二男の二人の子供を家に残す無惨さがたえられるものではなかった。それが現実に訪れたのだから、面くらわざるを得ない。

昨年相次いで関西地区の同じ会社に就職して行った長男と長女から「お父さん、万国博フレッグというのを売り出しているのを知っていますか。自分の都合のよいときに予約をとって置けば、急行券から寝台券まで一枚にしたものを売り出しています」といってきたのは、一九七〇年に入ったばかりの一月。子らの会社では訪ねてくる家族のために講座室や社宅などを宿舎に準備して待っていると。

この手紙を読む妻の顔は、うれしさにつつまれていた。しかしまだ、僕には納得がいかなかった。もちろんゼニのことが僕先した。家事は一切妻まかせではあるが、計算高い方では決して人に遅れをとってはいない。それに生来の消極性質もある。いろいろ理屈をつけてはなじり出す。

ところがである。間もなくして子供から次の手紙がきて「何日どろがよろしいか。日程は何日ぐらいか」と、もう決定ができたもののような催促だった。家に居る二人の子供も「家のことは心配いらんよ。朝なんか、隣りのおばあちゃんに頼んで起こしてもらうとよか」である。

もともと行きたがっていた妻の心は、もう頂天に達している。決心づけられた僕は手紙を書く。行ける日といえば、四、五、六の三カ月は健康保険日額の査定月。五十才を越えると、停年退職時の有利な方法を選びたい。七月に決める。上旬に一週間ほど、そちらも都合があろうから、と返事する。

二月のある日、子供から国鉄フレッグが送られてくる。「七月上旬で一週間ほどとありましたのでつぎのようにしました。往路を七月三日午前八時十九分、大牟田駅発特急ツバメ。京都駅着同日午後六時十分。京都駅までは二人で迎えにきます。帰りは七月八日午後六時三十五分、京都駅発急行天草寝台車。大牟田駅着七月九日午前九時四十五分」とある。もう万国博行きは決定した。

ついに七月、万国博行き決行の日はきた。もやもやとした心で迎える僕に、高二の二女がきっぱりという、「自分たちはいつでん一緒に居らるるけん、今度は姉ちゃんたちにしっかり甘えられてこんな」。意外にしっかりしている子供たちに、親バカがおかしい。

結婚して二十二年、映画にも連れ立ったことのない二人が、晴れて一週間を晩婚気分か。思いもよらなかった京都、大阪への旅行。窓外にすべり行く眺望は、感動を新しくする。平野の多い九州。中国のながめは、山また山。その山に向かって建ちこむ住宅地帯。近畿地区に入って、人間が空へのぼる時代がきたことを想像する。

春日神社、東大寺とめぐる旅行第一日、鹿の毛の感触が新しい。大仏の大きさが、なるほど大きいと思われはするが、僕の人間を変えるほどの感動にならない。親を案内するという自負からか、先きを行く息子が頼もしく感じられる。娘はうれしいようで、蝶のようにワンピースの色が動いて行く。

二日目は万国博会場へ。多い人いきれに、足の痛さが頭の中を先行する。

第三日はびわ湖一周。この日は朝から晴れわたる。息子が運転する。息子の車は鈴木フロンテ。自由気ままな行動は実にすばらしい。この日の景色は、親元を離れてわずか一年そこそこ、ようやく成人となる息子と未だ少女の娘がつくしてくれる最高の親孝行か。広い青々としたびわ湖の眺めが、そのまま僕の胸の中に広がって行く。

夕霞むびわ湖大橋に立って見る湖上の暮色。宿へ帰ると、家に残した二女から葉書が届いている。「家のことは心配いらん。だけど飯の残るのが処置なし」。ああ、俺はたのしい。今の思いのままで老いていきたい。

国土のせまい日本。人口密度の高い日本。それなのになんと遊休土地の広いこと。平安神宮に入り裏庭をめぐる思いは楽しい夢にばかりはつながらない。万国博の影響からか、多くの外人が日本人の間にまじって散さくをしている。これら外人たちは、日本の光景をどう受け取っているだろう。

S四五・一二・一五記